

查清華主編『東亞唐詩選本叢刊』（第一輯）

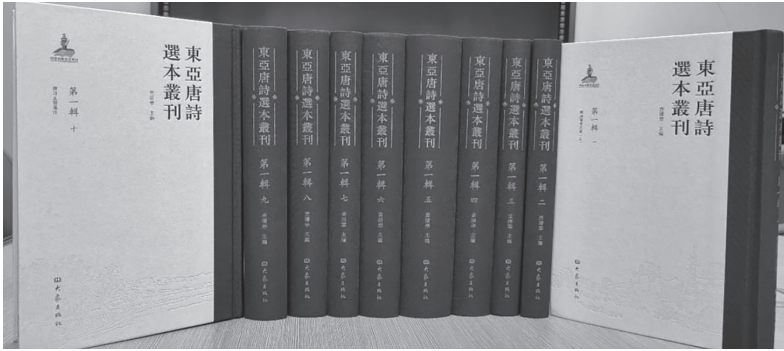
王 連旺（鄭州大學外國語與國際關係學院）

A Review of Anthology of Tang Poetry Series in East Asia by Zha Qinghua

Wang Lianwang

(School of International Studies, Zhengzhou University, Zhengzhou 450001, Henan, China)

Abstract: Anthology of Tang Poetry Series in East Asia edited by Zha Qinghua (Elephant Press, 2023), collected 12 kinds of Tang poetry anthology of the Edo and Meiji periods. The selected books all contain annotations and interpretations of Tang poetry by Japanese scholars, including 7 Chinese literature and 5 Japanese materials. In terms of literature selection, two main lines are designed, namely San Ti Shi, which praises the style of poetry of the middle and late Tang Dynasty, and Tang Poetry Anthology, which attaches importance to the poetry of the flourishing period of Tang Dynasty. They don't take side, and generally present the diversified appearance of Tang poetry in the Edo and Meiji periods. The book is organized and translated, which is more convenient for Chinese researchers to use. It can not only promote the study of San Ti Shi and Tang Poetry Anthology in China, but also provide new materials for the study of Tang poetry and the acceptance history of Japanese Tang poetry in China, which has important academic value.



查清華主編『東亞唐詩選本叢刊』（第一輯・全10冊）
大象出版社、2023年8月

近年、中国では東アジアにおける漢文典籍の研究が活況を見せている。もとよりそれらの典籍は日本漢籍、朝鮮漢籍、ベトナム漢籍など膨大な数を誇っていたが、昨今の学術交流の活発化及び典籍デジタルアーカイブ化にともなって、従来利用されてこなかった新たな資料として研究者の関心を引き起こしている。ここ数年中国の競争的研究助成プログラム「国家社会科学基金項目」（The National Social Science Fund of China）を例にして見ると、その状況を窺うことができる。当該プログラムは青年、一般、重点、重大の四つのランクに分けられており、重大プログラムの範囲に限定するなら、「東亜」をキーワードとして検索した結果、22件あり、そのほとんどが東アジアにおける漢文典籍をめぐる研究である。ジャンルから言えば、東アジア諺解文献、東アジア明代集部文献、東アジア詞学文献、東アジア漢文小説文献、東アジア唐詩学文献などが挙げられる。さらに「日本」をキーワードとして検索すると、24件見え、日本朱子学文献、日本『十三經注疏』文献、日本古字書、日本古写本、日本静嘉堂文庫所蔵文集などが挙げられる。本稿で取り上げる『東亞唐詩選本叢刊』（以下は『叢刊』と略称）は、国家社会科学基金重大項目「東

『東亞唐詩學文獻整理與研究』（代表者：查清華、18ZDA248）の助成を受けたものである。また、「日韓藏唐詩選本研究」（代表者：查屏球）のようなものもあり、中国における唐詩學新資料への関心の強さが見て取れる。

『叢刊』の第一輯は、全十冊で日本の唐詩文獻を十二種収めている。各冊の内容は次のようである。

第1－3冊 周弼選編、熊谷立閑集注『三体詩備考大成』

（整理者：林雅馨、楊焄）

第4冊 李攀竜選編、宇士新纂輯、竺顯常集補『唐詩集注』

（整理者：翁其斌、翁源、閔定慶）

第5冊 李攀竜選編、竺顯常注解『唐詩解頤』

（整理者：翁其斌、閔定慶）

平賀晋民編撰『唐詩選夷考』（整理者：吳夏平、陳思穎）

新井白蛾解『唐詩兇訓』

（訳者：高倩蓺、徐樑 整理者：潘偉利）

第6冊 新井白蛾編撰『唐詩絕句解』

（訳者：郭勇 整理者：潘偉利、閔定慶）

皆川淇園編撰『唐詩通解』（整理者：朱易安、張超）

葛西因是編撰『通俗唐詩解』（訳者・整理者：徐樑）

第7冊 入江南溟編撰『唐詩句解』（整理者：姚華、姚驕桐）

第8冊 李攀竜編選、千葉玄之口述『唐詩選講釈』

（訳者：崔紅花 整理者：黃鴻秋、但白瑾）

第9冊 周弼編撰、野口寧齋評釈『三体詩評釈』

（訳者・整理者：徐樑）

第10冊 高棟選編、東塾箋注『唐詩正声箋注』

（整理者：戴建國、劉曉）

以上をそれぞれ見てみると、幾つかの特徴を見出すことができる。

まず、『叢刊』は「影印」本ではなく、「整理」または「翻訳・整理」されたものである。従来、日本所蔵の漢籍を出版する際には、影印の方式が主流となっていた。例えば、清の鮑廷博・楊守敬ら、民国の羅振玉・張元濟らをはじめ、「解題」を加えた上で版本自体は影印するという伝統が続いている。「整理」というのは、翻刻したテキストに校勘を行い、句読点を付け加えることであり、「影印」と比べれば手間のかかる大きな作業を要し、難度も倍増する。また、日本語の注釈を中国語に訳すのは、その難度がさらに増大するであろう。一方、「影印」の場合は、幾つかの定本を選定して「解題」を書き添えれば早く出版することが可能である。無論、対象となる典籍についての広い見識があつてこそなし得ることはあるが、長澤規矩也のように、一人で多数の漢籍の影印出版を実現したのものもある。

特に、日本語の注釈を漢訳していることが評価すべきである。これまで日本語の資料を享受できなかった中国人研究者が広く享受できるようになると予想される。また、ひいては、そもそも中国の詩文に対する日本人による注釈が中国語に訳されて紹介されることが稀な現状において、それぞれ解釈のあり方が異なるはずの日本と中国における学术交流の促進、進展の可能性も含むものだとも思う。ただ、その一方で、原文を直接読解しないことによる誤解なり、そもそもの誤訳の怖れもあり、その点は、日本語原典資料の影印出版がなお意義深いものであるとも言える。

21世紀に入ってから、中国では日本所蔵の漢籍を「叢書」「叢刊」「大系」などの名目で解題を付けて盛んに影印出版してきた。だが、今後は古典籍デジタル化の発展につれて、影印出版の合理性と必要性が低下していくことと思われる。少なくとも影印出版は、秘蔵珍本などの版本自体が稀覯的価値を有したテキストの範囲に限定すべきであろう。このよ

うな背景のもとで、『叢刊』の主編が翻刻翻訳の作業方針を採用したこととは賢明な処置であったと言えよう。しかし、このような編纂方針を採用するには、なかなか少人数で完成できる作業ではなくなり、多くの研究者の参与が求められる。

1954年に設立された上海師範大学は唐詩学を研究する伝統があり、馬茂元（1918-1989）、胡雲翼（1906-1965）らがその端緒を開いた。1980年代より陳伯海氏は唐詩学を提唱してきた。2014年に上海師範大学唐詩学研究センターが設立され、センター長に查清華氏が就任した。七十年近くの伝統的發展を経て、『唐詩書目総録』『唐詩論評類編』『唐詩彙評』『唐詩学文献集粹』『唐詩総集纂要』『白居易詩文精読』『羅隱集系年校箋』『韓愈詩文精読』など多大な成果を世に問い続け、一方で多くの唐詩学研究者を育成し、唐詩文献整理の経験を積み重ねてきた。『叢刊』の出版作業には、整理者延べ22人、訳者延べ6人が参与し、7年余りの長きにわたってようやく『叢刊』の整理・翻訳作業を完成させたのは、その優れた伝統の蓄積と継承の賜物に外ならない。

次に、選書の理念をみってみる。『叢刊』所収のテキストはみな漢学者の注釈または訳注からなり、時期的には江戸時代、明治時代に集中している。前近代日本の唐詩受容史は大まかに奈良・平安期、鎌倉・室町期、江戸・明治期の三段階に分けられる。

第一段階では、『王勃集』『李嶠百廿詠』『白氏文集』などごく限られた唐人詩集が伝来しており、唐詩の全面的な解説、伝写、注釈にまではなお至っていない。中でも、白居易の詩は数百年にわたって受容され、独占的な地位を占めていた。日本における白居易受容の研究については、中国と日本の研究者によって数多くの業績が積み重ねられてきた。しかし、白詩に注釈を付け加えた平安期のものは極めて少なく、『叢刊』がこの時期のものを選用できなかった理由は、ここにあるのであろう。

第二段階では、唐詩伝来のルートが多岐にわたり、白詩の受容は相対的に下火になり、杜甫をはじめとする盛唐期の詩人、また中唐・晩唐の詩歌を多く収める『三体詩』が流行し、五山僧たちに愛読され、『杜詩抄』『曉風集』『三体詩幻雲抄』など多くの抄物が生まれることとなった。特に、『三体詩』は江戸期ひいては明治期まで流行し続けていた。『叢刊』では、鎌倉・室町期の抄物が収録されていないことは残念であるが、『叢刊』第1-3冊の『三体詩備考大成』、第9冊の『三体詩評釈』は江戸・明治期のものであるものの、ややその欠を補っている。近年、中国では『三体詩』の研究が進んでおり、杜暁勤氏、査屏球氏、卞東波氏、陳斐氏らが版本考証、宋詩輯佚、影印出版、彙注彙評などの面において、優れた業績を公刊している。『叢刊』の出版は、さらに『三体詩』研究のブームに拍車をかけるものと思われる。

第三段階に至ると、唐詩の受容は最盛期を迎えた。特に、荻生徂徠は李攀竜・王世貞が唱えた文学理論としての古文辞の影響を受け、盛唐期の詩を提唱し、当時の詩壇に大きな影響を与えた。李攀竜によって編まれたとされる『唐詩選』は最良の「教材」になって、長く世に行われていた。『叢刊』第4冊の『唐詩集注』、第5冊の『唐詩解頤』『唐詩選夷考』、第7冊の『唐詩句解』、第8冊の『唐詩選講釈』は、みなこの類のものである。また、『叢刊』第5、6冊が著録する新井白蛾『唐詩児訓』『唐詩絶句解』は、『唐詩選』を重要な参考文献の一つとしながら出来上がったものである。日本の唐詩学における『唐詩選』という唐詩選本の意義の大きさを改めて物語るものであり、該書を著録する『叢刊』の見識の高さを示している。これもまた中国における『唐詩選』研究に大きく寄与することが期待される。

要するに、『叢刊』の編纂者は、中唐・晩唐期の詩を推重する『三体詩』注本、および盛唐期の詩を敬う『唐詩選』注本の二つの系統のテキ

ストを手掛かりにして選択取捨したと思われ、それは即ち日本における唐詩受容の特色をしっかりと捉えたものであり、よく考えられたテキストの選択、配置であることが確認されるのである。

以上のように大変優れた『叢刊』ではあるが、決して完全無欠とは言えない。まず、各書の冒頭に「説明整理」が附されているものの、内容が基本的な情報を記述するのみにとどまっており、研究史を踏まえてのより詳細な解題が附されることが望まれる。次に、総集類の唐詩注本ばかりを収めたが、日本における唐詩受容の全体像も捉えようとするならば、白居易、杜甫など重要詩人の別集類注釈本も選用して欲しかったところである。更に言えば、森槐南、鈴木虎雄、吉川幸次郎、目加田誠、前野直彬、鈴木修次、村上哲見など近現代の研究者による唐詩訳注本も後続の出版計画に入れてほしい。

最後に、『叢刊』出版の価値を考えてみる。陳伯海、朱易安『唐詩書目総録』に著録されている文献数は4000種を超えるほどで、中国国内の研究に重要な資料となっている一方、新資料の発掘は必ずしも充分であったとは言い難い。したがって、海外、特に日本の唐詩学文献が中国の研究者たちの注意を喚起したのである。このような背景のもとで、『叢刊』は大変多くの、また極めて有意義な新資料を学界に提供した。これらの資料を利用して新たな問題が提起され、唐詩学の研究も更なる進化を遂げることが期待される。今後、第一輯「日本編」の刊行に引き続き、「韓国編」「ベトナム編」が出版され、東アジアにおける唐詩選本の全体像がさらに明らかになり、より多くの研究者によって共有され、研究が活性化することが期待される。

[付記]

本稿为河南省哲学社会科学规划年度项目（2021BLS007）的阶段性成果。

